

バイロンの詩に現われた天地觀

下 条 信 敏

バイロン (George Noel Gordon Byron 1788—1824) は、その性奔放で、炬火の如き情熱、大河を決するが如き意気の壮大、暴君の如き我儘と倨傲を有してゐた。彼自ら人に語つて「余はチャイルド・ハロルド (Childe Harold) たりし時日より、ドン・ジュアン (Don Juan) たりしこと、その年月長きなり」と。如何にもその言の如く、バイロンは寧ろドン・ジュアンその人であつた。

けれども、その胸裏には、高尚雄大なものがあつて、若冠の身でチャイルド・ハロルドとなり、宇宙自然の宏大なもの、美麗なもの、を觀、高尚な情想を以て、天地を愛したのであつた。

彼は人生が偽善に富み、競争甚だしく、衝突の至る処にあるを経験して、人間社会を好ましからぬものと思つたが、また、一方には天地自然の莊嚴優美であるを觀て、時にまた人間社会を脱出して、自然界において心身の靜穩平和を得るのが何よりであると感ずることもあつた。そして、自然を觀るに當つては、彼の人物は、純潔高尚、天地自然を愛するに當つては、その情實に親密なものであつて、真に自然を友として自然と共に語り、その言語は、

人間の言語よりも明瞭であると思惟したほどであつた。

バイロンその人であるチャイルド・ハロルドは、道学者の充満した郷国の社会に容れられないばかりか、自国の人々に何となく迫害さへも被つたので、

Adieu, adieu! my native shore

Fades o'er the waters blue;

The night-winds sigh, the breakers roar,

And shrieks the wild sea-mew.

You Sun that sets upon the sea

We follow in his flight;

Farewell awhile to him and thee,

My native Land — Good Night!

Harold Can. 1 St. xiii 1.

さらば、いざさらば、わが故国の岸边は

青藍の海原の末に消えて行く、

夜風は戦^{そと}ぎ白波は吼えて

野生の海鷗は鳴き叫ぶ。

海原に沈まんとするかしこの太陽を追うて
その沈む方直にわが船は進む、

この太陽にもお前にも暫く別れよう、
わが故国よ、さらばである。

と、告別の歌を船上で口吟み、天涯の孤客となつて、歐洲の天地に流浪し、イタリヤにさすらうたのである。彼は、自国の人々に何となく迫害を被り、心中平らならざるものがあつて、社会人生に向かつて正面的攻撃と解体的批評を加へてその不満を漏らしたのであるが、また、時には人間社会を脱して静かにその不満に満ちた心を休め、聊か自己を慰するところがあつたのである。

バイロンは、天地を家とし、山川河海を友としてこれと言語を交へた。彼の感情の盛な時は、自己の主観的に感ずるところの情が溢れ出て、自然万物に瀾漫し、自然を有情化してその生氣あることは自己と同一であると思ふに至つたのである。そこで

Live not the stars and mountains? Are the waves

Without a spirit? Are the dropping caves

Without a feeling in their silent tears?

The Island Can. 11 St. XVI

星も山も生けるに非ずや、

岸打つ波は精神を有せざるか、

露滴したたる洞窟も忍び泣きするの情なきか。

と。バイロンに取つては、是等は皆情もあれば意もあつて、彼が之を愛すれば是等もまた彼を愛するのである。それで、バイロンの往く処は皆その家であり、接する処は皆その親しい友である。

Where rose the mountains, there to him were friends;

Where roll'd the ocean, thereon was his home;

Where a blue sky, and glowing clime, extends,

He had the passion and the power to roam;

The desert, forest, cavern, breaker's foam,

Were unto him Companionship; they spake

A mutual language, clearer than the tome

Of his land's tongue, which he would oft forsake

For Nature's page glass'd by sunbeams on the lake.

Harold Can. 111 St. xiii

山の高く聳ゆる処、彼の朋友あり、

大洋怒濤の逆巻く処、その上には彼の住所あり、

天は晴れて蒼く、氣候の暖くおだやかなる処、

彼そこに逍遙するの情と力を有し、

沙漠も森林も洞窟もまた波濤も、

彼には皆朋友にして、彼等互の言語を以て語れば

母国の言語に写さるゝ書冊に勝りて明瞭なり。

書冊しばしば抛ちて

彼は湖面に日光の写す自然の文字をよむ。

と。かくて、彼は、天地と親密な関係を結んで、

And made him friends of mountains; with the stars
And the quick Spirit of the Universe
He held his dialogues; and they did teach
To him the magic of their mysteries;
To him the book of Night was opened wide,
And voices from the deep abyss revealed
A marvel and a secret — Be it so.

The Dream St. viii

山を友とし、

星辰及び宇宙の活霊と語れば、

彼等もまた彼に魔術を教へ、

彼に向かいて「夜の書」を繙き、

幽玄よりは声ありて

宇宙の驚嘆とその秘密を啓示せり。

バイロンは、夜を好み、その森厳な趣を愛するのである。マンフレッド (Manfred) が夜に当つて独りその感に堪へないのを写したのは、即ちバイロンの意を写したものである。バイロンに取つては、夜は人間の容貞よりも親しく思はれたのである。彼の言ふに、

The stars are forth, the moon above the tops
Of the snow-shining mountains. — Beautiful!
I linger yet with Nature, for the Night
Hath been to me a more familiar face

Than that of man; and in her starry shade
Of dim and solitary loveliness,
I learn'd the language of another world.

Manfred Act III Scene iv

星は進み、

月は雪山の頂きに輝く——美なるかな。

われは自然と共に逍遙す、

何となれば夜は人間の容貞よりも親しければなり。

而して星の光微かにして、

蔭ほの暗き処において

われは他界の言語を学べり。

と。「夜の書」及び「他界の書」、あゝ、なんと陰鬱厭世神秘の甚だしいことであらう。勿論夜の美しさはわれらの愛するところであるが、陰鬱で神秘的な感情をこの間に起すことはわれらの好まぬところである。バイロンは、時にかゝる陰鬱で病的な感情を起すこともあるにはあつたが、これは一時マンフレッドであつた時の彼の感に過ぎない。そのチャイルド・ハロルドであつた時においては、彼の夜の観想は極めて健康で且つ美麗なものであつた。夜は深い。宇宙の夜に当り、一人こゝに立つて、その高尚森厳であり、無限であるのを観て誰かその心気を高めないものがあらうか。チャイルド・ハロルドの観るに、

Ye stars! which are the poetry of heaven!

If man and empires, — 'tis to be forgiven,
That in our aspirations to be great,
Our destinies o'erleap their mortal state,
And claim a kindred with you; for ye are
A beauty and a mystery, and create
In us such love and reverence from afar,
That fortune, fame, power, life, have named themselves
a star.

Harold Can. 111 St. lxxxviii

おと星辰よ、天上の詩なる星辰よ、
爾の輝く紙面に人間と帝国の
運命を讀み取らんとするわれらをゆるせよ、
偉大ならんとする憧れにまかせて、
われらの宿命は人間の世を飛び出でて
爾と同じき類であらんとするも。
星よ爾は美麗であり又神秘である、
而して遙けき天空より愛情と敬意をわが胸に湧かす、
運命も名譽も權力も生命も皆星たるの力ありと曰ふ各生命は
ど。

All heaven and earth are still — Though not in sleep,
But breathless, as we grow when feeling most;
And silent, as we stand in thoughts too deep: —
All heaven and earth are still: From the high host

Of stars, to the lull'd lake and mountain-coast,
All is concentr'd in a life intense,
Where not a beam, nor air, nor leaf is lost,
But hath a part of being, and a sense
Of that which is of all Creator and defence.

Harold Can. 111 St. lxxxix

天も地も静寂——眠りにはあらねど、
われらの感情高まる時の如く呼吸を収め、
幽玄なる思ひに沈める時に似て寂寞たり。
天上の群星より静けき湖水、山の縁に至るまで、
天地万物ただ静寂、
もの皆激しき生命に結ばる。
光も風も木の葉も一として空しからず、
みな生命の一部を含み、
すべてを造り、すべてを守る造花の力を持つ。

Then stirs the feeling infinite, so felt
In solitude, where we are least alone;
A truth, which through our being then doth melt,
And purifies from self: it is a tone,
The soul and source of music, which makes known
Eternal harmony, and sheds a charm
Like to the fabled Cytherea's zone,
Binding all things with beauty; 't would disarm

The spectre Death, had he substantial power to harm.

Harold Can. III St. xc

やがて独りならぬ世に、寂寞を感じるときとながらの
厳肅無限の情感起る。

わが生命に行きわたり、

わが私を払ひのけ、清むる真理——一の調、

その音楽の魂、源泉、永劫の諧音を悟らしめ、

宛も女神シテモの帯の伝説の如く

美を以て万物を結びしに

似たる魅力を注ぐもの、

死の影に人を傷くる力事実ありとも死を恐れる念を去らしめ
るもの。

Not vainly did the early Persian make

His altar the high places, and the peak

Of earth-obergazing mountains, and thus take

A fit and unwall'd temple, there to seek,

Uprear'd of human hands. Come, and compare

Columns and idol-dwellings, Goth or Greek,

With Nature's realms of worship, earth and air,

Nor fix on fond abodes to circumscribe thy pray'r!

Harold Can. III St. xci

遠き昔のヘルシヤ人が祭壇を

高山の頂上につゝき立て、

増壁なきいみじき殿堂を設けて、

自然的神靈を求めしは豈意味なからんや。

人間の手に立てられし詞堂は、靈の誓には

げにもあまりに弱かりき、来りて比べよ、

ゴース或はグリースの偶像の宿と円柱と、

この自然の手になる礼拝所、大地と空と比較せよ、

又増壁ある伽藍に爾の祈を限ること勿れ。

と。この感情、この精神は、やがてバイロンに取つては宗教で

あつた。彼は、宇宙の永劫の調和に融合して、これに安心立命し

たのである。かの宗教家が、殿堂を建て、信条を作り、感情と信

仰をこれに限つて、自縛するが如きの比ではない。バイロンは、

この幽玄な思想で自然を崇拜したのである。

ところが天候は一変した。

The sky is changed! —— and such a change! Oh night,

And storm and darkness, ye are wondrous strong,

Yet lovely in your strength, as is the light

Of a dark eye in woman! Far along,

From peak to peak, the rattling crags among

Leaps the live thunder! Not from one lone cloud,

But every mountain now hath found a tongue,

And Jura answers, through her misty shroud,

Back to the joyous Alps, who call to her aloud!

Harold Can. III St xcii

天候は一変せり、甚だしき変化なるかな、

あゝ夜よ、暴風よ、闇黒よ、爾等は怪しきまでに強し、
されどその強力のうちにも麗しきこと、

宛も女の黒き瞳ひとみの光にも譬へんか、

嶺から嶺に互り、打ちふるふ絶壁の間には

活雷股々として轟く。

たゞ一片の雷雲のみならず、衆山は皆声高く雄叫び

ヂューラの峰はその濛々たる雲霧の中より

高く彼女に呼び叫ぶ歓喜のアルプス山に呼応して答ふ。

寂寞たる夜——空に星辰輝く夜は、忽ち変化して、激しい夜となつた。活雷は股々と轟き、電光は閃々と輝き、山嶽はために鳴動する。あゝ天候の変化はなんと甚だしいことだらう。けれども、この寂然たる夜を好んだバイロンは、又その力の発現した恐ろしい夜景を好んだのである。

And this is in the night: — Most glorious night!

Thou wert not sent for slumber! let me be

A sharer in thy fierce and far delight, —

A portion of the tempest and of thee!

How the lit lake shines, a phosphoric sea,

And the big rain comes dancing to the earth!;

And now again 't is black, — and now, the glee

Of the loud hills shakes with its mountain-mirth,

As if they did rejoice o'er a young earth-quake's birth.

Harold Can. III St xciii

あゝこれこそ実に夜に存す——最も光榮ある夜、
爾は睡眠の為に作られたるにあらず、

爾の激しく広き悦にわれを与らしめよ、

この暴風あらしとこの夜のなかに生きるものとせよ、

湖面は稲妻に輝き燐光の海となり、

篠突く雨はおどりつゝ大地を打つ、

忽ちにして暗黒となり、又忽ちにして

衆山声を揚げてその山靈の狂歡にうちふるふ、

新しき地震の誕生を欣賀する如くして。

バイロンは、自己の胸中を暴風に比べて之に同情的疑問を發して言ふに、

But where of ye, O tempests! is the goal?

Are ye like those within the human breast?

Or do ye find, at length, like eagles, some high nest?

Harold Can. III St. xcvi

あゝ暴風よ、爾の目的は何れにありや、

人間の胸中に鬱屈するが如きものなりや、

或は遂に鷲の如く高きにある巢を見出すや。

と。あゝ暴風の胸中（若しあるとするならば）は、恐らくバイロンの胸中の如きものであらう。暴風に若し意あれば「わが胸中はバイロンの胸中なり」と言ふであらう。バイロンの思想は実に

力に充ちてゐる。だからアルプスの高山を見て、

+ + + as to show

How Earth may pierce to Heaven, + +

地は如何ばかり天を突き得るやを示す。

ものであるとし、人間をして下界にあつて、後に瞠若たらしめ、空しくその高きを仰がしめるに比べ、自然の如何に壮大であるかを敬畏してゐる。

ハイロンはかく力の感に充ちてゐる。又鬱勃たる不平が彼の胸中には蟠屈してゐる。これを吐露するには、如何なる言語ならばよく一時にこれを爆發させることが出来るであらうか。雷霆霹靂の一喝があるだけである。彼の言ふに、

Could I embody and unbosom now

That which is most within me, — could I wreak

My thoughts upon expression, and thus throw

Soul, heart, mind, passions, feelings, strong or weak,

All that I would have sought, and all I seek,

Bear, know, feel and yet breathe — into one word,

And that one word were Lightning, I would speak;

But as it is, I live and die unheard,

With a most voiceless thought, sheathing it as a sword.

Harold Can. III St. xcvi

若し、わが心にありて満ちふくるものを今洩らし、形にあらはし得べくんば——

思を言語に洩し得て、魂と心と情と思と

(大小となく強弱となく)すべてわが欲する処、

すべてわが求むる処、忍びて知りて感ずる処、

尽くこれを一語に托して表現し得るならば、

而してこの一語雷光ならばわれ言はむ、

さもあれ事はかくあれば、われ言はずして生き且つ死なむ、

声なき思を持つることさながら利剣を鞘中に蔵するが如く。

と。雷霆霹靂の大喝、これこそ不平を一時に爆裂せしめるに最

もふさはしいものであるとしてゐる。

天地には陰と陽があり、静と動がある。今や夜は去つて昼とな

る。陰闇な暗黒、恐ろしい電光は影を収めて微笑ましい朝となる。

The morn is up again, the dewy morn,

With breath all incense, and with cheek all bloom,

Laughing the clouds away with playful scorn,

And living as if earth contain'd no tomb, —

And growing into day: we may resume

The march of our existence: + +

Harold Can. III St. xciii

再び朝とはなりぬ、露けき朝、

その息すべて香ぐはしく、その頬すべてくれなゐに、

その戯れの悔りに、もろもろの雲霧笑ひ去り、

宛もこの世に墓のなき如く、

生きつゝやがて白日と光りかがやく。

われらは再び生存の途に進軍す。

バイロンは、かく自然を愛し、自ら自然と合体し、時には暴風であらうと希ひ、又時には天体そのものゝあらうと思つたのである。

かくて天地の美と大とに打たれて、恍惚としてわれを失ふことが屢々であつた。彼がかく自然を愛すれば自然もまた彼を愛して、

+ + — they woo and clasp us to their spheres,

Dissolve this clog and clod of clay before

Its hour and merge our soul in the great shore.

The Island Can. 11 St. xvi

その範域中にわれを抱き、

この泥土の身を溶解し、

以て自然の大海に合一せしむ。

と。天地と合体して我はわれを失つて天地そのものとなるのである。

Are not the mountains, waves, and skies, a part

Of me and of my soul, as I of them?

Harold Can. 111 St. lxxv

山も海も又大空も皆われ及びわが魂の一部たること

なほ、われ又彼等の一部たるが如きに非ずや。

と。なほ天地とわれとの合体することを言つた彼の有名な句に、

I live not in myself, but I become

Portion of that around me; and to me

High mountains are a feeling, but the hum

Of human cities torture: I can see

Nothing to loathe in nature, save to be

A link reluctant in a fleshly chain,

Class'd among creatures, when the soul can flee,

And with the sky, the peak, the heaving plain

Of ocean, or the stars, mingle, and not in vain.

Harold Can. 111 St lxxii

われわが身の中に生きざりて、

わが周囲のものの一部となる。

又われに取りては高山も快く感情を誘ふもの、

しかして人の作れる都市の騒音こそわが苦しむところ。

自然のなかに忌むべきものは一も見ず、

われたる人間に生を受け、形骸の連鎖にて心にもなき一環を

成しつゝ、生物の間に交じるを嫌ふ他には。

わが魂ははるかにとびかけり、その道空しからずして、

或は蒼空或は峰嶺或は大洋或は星辰と混じり、自由の羽を伸ば

ちむ。

And thus I am absorb'd and this is life:

I look upon the peopled desert past

As on a place of agony and strife,
Where, for some sin, to sorrow I was cast,
To act and suffer, but remount at last
With a fresh pinion; which I feel to spring
Through young, yet waxing vigorous as the blast
Which it would cope with, on delighted wing,
Spurning the clay-cold bonds which round our being
cling.

Harold Can. 111 St. lxxiii

かくてわれは四囲の自然に融け入る、これぞ誠の生命なる、
かくて苦悶と粉争の場所として
われ過ぎ去りし人間の沙漠を眺む、
そこに一の罪科の故に或は悲しみ或は労苦すべき運命に陥り
き、
働くべく、悩むべく、しかして遂に新たなる
翼に乗じてのぼるべく——われ今その羽生ゆるを見ゆ。
若くもそが張り合ふ陣風と共に強まりて、
勇み喜び、われを繋縛する泥土の如くつめたき
肉体なる桎梏を蹴つて飛び上る。

And when, at length, the mind shall be all free
From what it hates in this degraded form,
Reft of its carnal life, save what shall be
Existent happier in the fly and worm, ——

When elements to elements conform,
And dust is as it should be, shall I not
Feel all I see, less dazzling, but more warm?
The bodiless thought? the Spirit of each spot?
Of which, even now, I share at times the immortal lot?
Harold Can. 111 St. lxxiv

而して遂にわが心、この醜骸の姿に、
その忌みきらふ処より
解けて自由となり、形骸の生はなれ、
腐肉に巣くふ蛆虫と化して幸福に生きる部分のみ残る時、
凡てわが見るところのものはそのまばゆさを少うし、
前より更に暖かに感ぜられざるや。
これ即ち無形の思想、山河の靈、
その永劫の命、今も時には身に占めて感ず。
Of me and of my soul, as I of them?
Is not the love of these deep in my heart
With a pure passion? should I not contemn
All objects, if compared with these? and stem
A tide of suffering, rather than forego
Such feelings for the hard and worldly phlegm
Of those whose eyes are only turn'd below,
Gazing upon the ground' with thoughts which dare not
glow?

山も海も又大空も皆われ及びわが魂の一部たること

なほ、われ又彼等の一部たるが如きに非ずや。

これらに対するわが愛は純潔の情に深うして、

これらに比しては物すべて

われ皆侮り棄つべきかな。

輝き得ざる思ひ持ちて、眼は只地上にのみ向かひ、

地を顧みる人々のつらきいやしき心に替へ、

この美しき天真を楽しむ心を棄てんより、

寧ろ銀苦の潮に反抗せむ。

バイロンの天地観はまさにこれである。この時のバイロンの「我」は天地であつたのである。彼はかく天地自然に対しては全然無我の境界を説いたのである。然し一度自然界に背を向けて人間社会に立ち入る時には、強固不撓の「我」の念は勃然として起り、主義を生じ、不満を生じ、忿怒を生じ、軽侮を生じ、熱罵をも生ずるのであつた。そしてその極遂に一種の不平的厭世の言をなすに至つたのである。

——本学教授・英文学——